

父親の養育行動が 思春期の子どもの情緒と生活面での自立に与える影響 —中国山西省の調査から—

劉 楠
(ジェンダー学際研究専攻)

I. 研究の背景と目的

中国では、1978年より一人っ子政策が施行された。都市部では二人目の子どもを出産すると職場から解雇されるといった賞罰制度があるため、一人っ子政策が徹底されている。一方、農村部では、労働力（特に男児の数）が家族の収入と関連するため、多くの男児を産むことに経済価値があるとされていた（若林 1994）。したがって、「多子多福」（子どもが多ければ福も多い）などの伝統的観念が根強い農村においては、一人っ子政策の普及は困難であった。そこで、政府は一人っ子政策をより徹底するために、計画外出産の子には耕地を与えず、両親のこれまでの「自留地」（いま持っている耕地）と新しく分配される耕地の面積も減らすこととした。また、一人っ子の場合には「一人っ子証」を授与し、二倍の耕地を分配するという生産責任制と耕地分配制度を連動的に実施するようになった。しかし1984年以降、労働力の少ない農家への配慮から、農村二子策を認めるといった特殊な対応もなされている（若林 1989）。このようなことから、農村部では、都市部とは異なる政策によって、二人以上の子どもを持つ家族が多いのが現状である。

都市部と農村部の家族構成は若干異なるが、親の養育行動については、親が思春期の子どもの学業や成績に関心を払うことが共通の特徴である。子どもを大学へ進学させるために親は全力でサポートし、金銭面のみならず、子どもの身の回りの世話を担い、さらに精神面においても日頃から暖かく応援すること等を心がけている。高校生を持つ親の子どもへの大学進学への期待が高まっている理由は、親たちが学齢期を過ごした時代の社会背景にある。親たちの学齢期は1960年代～70年代にかけての文化大革命当時であったため、混乱のなか、勉強や進学の手がかりがなかった。また、物質的に乏しい時代であったため、大学への進学を実現できなかった。このようなことから、多くの親たちは

自分の実現できなかった大学進学を子どもに実現させたいと願っている（松原・鄧 1990）。この状況の中で、親が子どもの成績のみを重視するばかりで、生活習慣を教えることが見落とされる傾向にあり、生活面において親に依存して自立できない子どもが多いといわれている（胡 1996）。特に都市部の親においては子どもの大学進学を過剰に期待する傾向にあるが、農村部においても親が子どもに対して過度に干渉する傾向が見られる（雷・堂野 2003）。このように、現代中国における一人っ子政策と少子化の流れの中で、中国の親は子どもを大切に育てているが、一方で子どもの生活への干渉が過度であることが指摘されている。

中国では、子どもが中学校や高校に進学する段階で、寄宿制の学校を選ぶことが多い（楊 2010）。寄宿生と非寄宿生を比較した研究によると、寄宿当初、寄宿生は親からのサポートが十分ではないため、非寄宿生のほうが寄宿生より心理健康状況が良いと報告されている（張ほか 2009）。また、非寄宿生は親からの生活援助が多く、生活面での自立があまりできていないことも指摘されている（楊 2010）。その理由となる社会背景は二つ挙げられる。まず、学校では進学率を追求するため、子どもの学業成績への指導はよくなされているが、子どもの情緒面や生活面での自立意識を育む教育はあまり行われておらず、子どもの情緒面や生活面での自立意識を育むことに関しては、家庭教育に依存しているのが現状である（楊 2010）。次に、現代中国社会においては少子化のために、子どもは親あるいは祖父母に甘やかされる傾向にあり、親と同居・近居の場合、身の回りのことを親あるいは祖父母にやってもらっていることが多い。以上のことから、子どもの情緒面や生活面の自立を検討するには、家庭内に視点を置くことが必要と思われる。また、中国での家庭教育の現状をより良いものとするため、父親と母親の養育行動が子どもの自立にどのような影響を与えるのかについて明確に示すことが必要と考えられる。

そこで、本研究の目的として以下の2点を挙げる。一つは、家族システム論を援用し、父親の子どもへの直接的な影響と間接的な影響を検討することである。直接的な影響とは、他者を介しない父親の子どもへの影響を意味する。間接的な影響というのは、父親の協力的な関わりが夫婦関係に影響し、さらに夫婦関係が母親の支援行動に影響するという、母親を介した父親の子どもへの間接的な影響のことである。父親の子どもへの直接的な影響と間接的な影響を検討する理由として、母子関係の背後に父親が存在し、父子関係の背後に母親が存在するため、父母子の結びつきは分離して考えられない家族単位（岡堂 1989）といえる。したがって、家族の相互影響性を検討することは意義があると考えられる。もう一つの目的は、高校生とその親に焦点を当て、父親と母親の支援行動が思春期の子どもの情緒的自立と生活面での自立にどのような影響を与えているのかを明らかにすることである。親の子どもへの影響力については、小・中学校までは、母親のほうが父親より高いが、高校生では母親よりも父親の威厳が子どもに認知されており、父親の子どもへの影響力が上昇している（孫 2009）。以上のことから、本論文では特に、父親の支援行動を中心に取り上げる。

II. 理論と先行研究

1. 本研究における家族システム論の援用

Belsky (1981) は、夫婦関係、子どもの行動・発達、ペアレンティングによる相互のかかわりによって家庭がシステムとして変化していくと指摘している。尾形 (2007) は、Belsky (1981) の研究では「夫婦関係」を形成する母親、父親の相互の影響力のどちらが中心的な役割を担っているのかについて明確に示されておらず、家族システムのサブシステムである夫婦関係について取り入れるべきことが2つあると指摘した。一つは、父親からの協力的な関わりを基とした「夫婦関係」を軸とする視点である。もう一つは、父親のコミュニケーションや家事への援助などを中心とする関わりが、家族成員に大きな影響を与えることを検討する必要があるということである（尾形 2007）。本研究では、父親の子どもへの直接的な影響と間接的な影響を検討するという二つの目的があるが、このうち、間接的な影響においては、尾形 (2007) が提唱するように「夫婦関係」を軸とし、父親の支援行動の夫婦関係に対する影響、そして夫婦関係を媒介とした母親の支援行動への影響を明らかにし、父親の子どもへの間接的な影響を検討する。

これまで家族システム論を用いた研究は乳幼児を対象とした場合が多かったが、本研究では高校生を対象として家族システム論を援用する。思春期の子どもは、基本的には

乳幼児の子どもと同様に経済面と情緒面において親に依存しているが、乳幼児のように親の世話なしでは生活できないということはない。また、乳幼児は親を媒介し、外部の世界と交流するが、思春期の子どもは、親に頼らず、学校、地域など外部との交流を独自に行う機会が増える。子どもの成長に伴い、いずれ現在の家族システムから分離し、自分自身が新たに家族システムを形成するため、「青年の自立化は現在の家族システムからの分離独立という形でなされる必要がある」と指摘されている（八木 1990 P.38）。この意味では、自立という課題¹が、青年期の子どもにおいて重要となるのみならず、青年期以前の思春期から重視しなければならないと考えられる。何故ならば思春期の子どもはいずれ現在の家族システムから離れ、自分自身が新たに家族システムを形成することを前提としているからである。この点において、思春期の子どもを対象とする本研究に家族システム論を援用することには意義がある。

2. 先行研究

「思春期」は子どもが両親にすべて頼っている状態から独立していく過程にあり、個人として確立する大人への移行期である（McCandless & Coop 1979 = 1985）。この時期の子どもは、生活面と情緒面では親から分離する意思が強く現れ、個体化していくが、生活面と情緒面では親からの完全な分離が出来ているとは限らない（岡村ほか 1995）。

情緒面において「自立」概念とは、「甘え」や「依存」と対立的な概念であった（畠中 2007）。しかしながら、ここでは情緒的自立を、情緒的安定を実現していくための概念として用いる。情緒的に自立をしていくためには、甘えや依存が必要である。その理由としては、個人の「自立」を促すことが、単に「甘え」を否定した突き放しだけでは、希望を失い、絶望する可能性もある。しかし、「甘え」によって関係性を築いていくことで関係性のなかでの「自立」が促されていく。「甘え」は、個人が経験する葛藤を乗り越えていく過程で、重要な働きをするからである。このようなことから、個々の家族において、子どもは親に受け入れられることによって、情緒面での安定（「情緒的自立」）をしていくと論述されている（畠中 2007）。また、生活面での自立を検討するが、生活において身の回りのことを自分自身でどのくらいできているかを「生活面での自立」と名づける（鄭 2008）。情緒的自立と生活面での自立との関連について、成人男性の場合には有意な関係がみられなかったが、成人女性の場合、情緒面の自立が高い場合、生活面での自立も高くなると示されている（尹 2007）。また、青年期の子どもの場合、親の支援的な養育行動が子どもの依存を助長させるという報告もあり、親との居住距離

が近いほど、親の支援を受けやすいため、子どもはより依存的になり、また男性より女性のほうが親の態度に影響されやすいと指摘されている（宮本ほか 1997；尹 2007）。

父親の子育て参加が母親・子どもへ及ぼす影響について、父親の子育て遂行が夫婦関係の良好度を規定し、父親の子育て参加と妻への情緒的サポートが高ければ妻の夫婦関係満足度が向上する（大和 2001）。また、夫婦関係が良好であれば母親の子どもとの関わりに影響を及ぼし、さらに思春期の子どもの精神的健康に良い影響を与えると示されている（高橋 1998）。一方、夫婦関係が良くない場合、逆に母親の子どもに対する関わりが多くなり、子どもに良い影響をもたらすという報告もある（Engfer 1988）。

親の支援行動に影響する要因として、主に父親・母親の性別役割分業観、父親の家事参加、父親の持つ子どもへの価値、子どもの性別、子どもの数と父親の年齢に注目する。

性別役割分業に関しては、「男性は仕事、女性は家庭」という考え方を持っている父親のほうがより非伝統的な考えを持つ父親よりも家事・子育て参加が少ないことが明らかにされている（Ishii-Kuntz & Coltrane 1992）。また、家事参加の高い父親の場合、子育て参加が高いと報告されている（Ishii-Kuntz & Coltrane 1992）。子どもの価値について、中国社科院家庭研究室（1994）は、大都市の人々は主に情緒的な満足と親の夢を実現させるために子どもを産み育てるが、一方、農村部の人々は、家系の維持や老後のために息子を育てるという伝統的な意識がまだ強いと指摘している。子どもの性別について、男児は家系の継続かつ父親の継承者であり、息子を一人の個人としてよりも、将来的に重要な家族役割を遂行する人間として考える傾向があると思われる。一方娘の扶養には経費がかかることといわれている。それは、娘は息子と異なり、大人になると、嫁として家を出ざるを得ないからである（Lynn 1978 = 1981）。また、子どもの数の多い家庭では、母親以外の手助けが必要となるため、父親の子育て参加が多くなることが示されている（石井 2009）。また、本論文で父親の年齢を取り上げる理由として、1980年代より義務教育の普及

と高等教育の拡充の結果、父親の年齢による世代間格差のあることが考えられるためである。

以上の先行研究を踏まえ、図1に示すように、本研究では父親・母親の性別役割分業観、父親の家事参加、父親の考える子どもの価値、子どもの性別、子どもの数と父親の年齢は父親と母親の養育行動へ影響を及ぼし、父親の子どもへの支援行動は夫婦関係を通して母親の子どもへの支援行動にも影響すると仮定する。さらに、子どもの情緒的自立と生活の自立に対し、父親の支援行動からの直接の影響と、母親の支援行動を通しての父親の間接的な影響が存在するものと仮説を立て検証する。

Ⅲ. 調査方法

1. 調査時期・方法

本研究では有意抽出法²を用いて、2009年9月～10月に中国山西省小都市A市郊外、2010年9月～10月省庁所在地B市においてそれぞれ二つの公立高校（重点校と普通校1つずつ）に在学する2年生とその父親、母親を対象に、質問紙調査を行った。高校生に対しては学校での集合調査を行ったが、父親・母親への調査票はプライバシーの保護のためそれぞれ専用の封筒に入れて、高校生を介して配布し、回収した。子ども・父親・母親への配布数は900組、回収数は746組であり、子どもと親のマッチングデータの回収率は74.8%であった。

2. 対象者の属性

表1に父親の属性について、年齢（平均43.62歳）、学歴（中卒43.9%、高卒25.1%、三・四年制大学卒及び以上18.9%）、職種（政府機関の役員14.2%、企業団体正社員20.9%、臨時雇い10.8%、自営業者17.8%、農民26.8%）を示した。父親の年収については5千元（約7.6万円）³以上～1万元（約15.2万円）未満が25.2%で、1万元（約15.2万円）以上～5万元（約76万円）未満が45.9%を占めている。中部地区（山西省を含む）の住民の平均年収は、

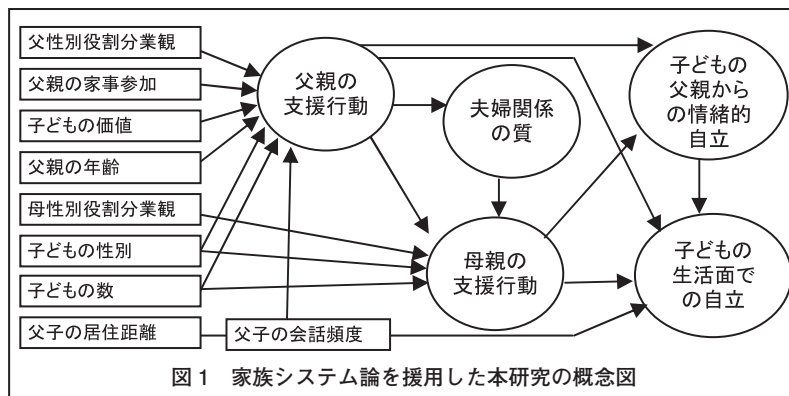


図1 家族システム論を援用した本研究の概念図

表1 対象者高校生とその父親・母親に関する属性 (N=645)

変数	父親			母親		
	平均値	SD	範囲	平均値	SD	範囲
年齢	43.62	3.81	33 ~ 55	41.96	3.76	28 ~ 55
学歴	3.63	1.18	1 ~ 7	3.46	1.15	1 ~ 7
小学校卒及び以下	12.10%			18.70%		
中学校卒	43.90%			39.40%		
高校 (中専・職高) 卒	25.10%			26.50%		
三・四年制大学卒及び以上	18.90%			15.40%		
職種	3.61	1.82	1 ~ 8	3.85	1.84	1 ~ 8
政府機関の役員	14.20%			11.20%		
企業・団体の正社員	20.90%			17.50%		
臨時雇い	10.80%			13.50%		
自営業者	17.80%			15.60%		
農民	26.80%			30.80%		
その他	9.50%			11.40%		
年収	3.59	1.18	1 ~ 8	3.03	1.48	1 ~ 8
5 千円未満 (収入無含)	17.20%			38.30%		
5 千円以上 ~ 1 万円未満	25.20%			24.20%		
1 万円以上 ~ 5 万円未満	45.90%			29.20%		
5 万円以上	11.70%			8.30%		
子どもの数	1.67	0.66	1 ~ 4			
一人	44.30%					
二人	45.10%					
三人	10.10%					
四人	0.50%					
子どもの年齢	16.93	0.67	14 ~ 19			
寄宿状況	1.86	0.70	1 ~ 5			
自宅	27.90%					
学校の寮	61.70%					
学校近くのアパート	7.40%					
その他	3.00%					
子どもの性別	1.61	0.49	1 ~ 2			
男子	38.60%					
女子	61.40%					
住居距離	2.50	1.23	1 ~ 4	2.32	0.84	1 ~ 4
子どもと同居している	37.80%			41.50%		
歩いて 30 分以内	5.80%			6.00%		
車で片道 1 時間未満	24.90%			21.60%		
車で片道 1 時間以上	31.50%			30.90%		

一人当たり 10025 円 (約 15.2 万円) である (中華人民共和国国家統計局 2010)。本研究の対象者は 1 万円 (約 15.2 万円) 以上 ~ 5 万円 (約 76 万円) 未満の割合が 5 割弱を占めているため、中部地区の住民の年収 (約 15.2 万円) よりやや高いことがわかる。また、子どもの数は一人っ子家庭 44.3%、二人の子どもを持つ家庭 45.1% など、子どもの年齢は平均 16.9 歳、性別は男子 38.6%、女子 61.4%、居住状況は自宅 27.9%、学校の寮 61.7% など、父親との居住

距離は同居 37.8%、徒歩 30 分以内 5.8%、車で片道 1 時間未満 24.9%、車で片道 1 時間以上 31.5% であった。

3. 分析に用いた変数

1) 子どもの情緒的自立 Hoffman (1984) の青年期の子どもの情緒的自立尺度を参考に「父親と親しいと思うか」、「生活上の問題が発生したらまず父親に相談するか」、「日常生活で父親と最も一緒に時間を過ごしたいと思う

か、「困ったことがあったらまず父親に助けを求めか」、「父親から離れたらさびしくなるか」、「父親はあなたにとって一番重要な人間なのか」の6項目について「1. そうだ (4点)」～「4. ちがう (1点)」の4件法で子どもに尋ね、「子どもの情緒的自立」と命名し、合成変数として分析に用いた ($\alpha = 0.75$)。この尺度では得点が高ければ子どもと父親の関係が情緒面で安定(「情緒的自立」)していることを意味する。

2) 子どもの生活面での自立 加藤(2001)の「家庭での子どもの行動」を参考に、「子どもは家の中を掃除する」、「自分の部屋の片付けをする」、「自分のベッドを整える」、「食事の配膳をする」、「食事の後片付けをする」、「食事を作る」、「家庭内必需品の買い物をする」7項目について、「1. 頻繁にある (4点)」～「4. 全くない (1点)」の4件法を用いて、子どもの実家にいる時の様子を父親に尋ねた($\alpha = 0.86$)。それぞれ項目の得点が高ければ子どもの生活面での自立度が高いことを意味する。

3) 親の支援行動 Hombeck et al (1995)と末盛(2008)の尺度を参照し、12項目について「1. 頻繁にある (4点)」～「4. 全くない (1点)」の4件法を用いて父親・母親それぞれに尋ねた。父親の支援行動に関する項目はプロマックス回転による主因子法の分析の結果、数値の低い2項目を除き、抽出された因子が3つであった。第1因子は「子どもにはいつも優しく接している」、「子どもを励ましている」、「子どもに自分のことを自分で決めさせている」、「子どもの話を聞いている」、「子どもと意見が食い違うとき、子どもの意見に耳を傾けている」、「『勉強しなさい』とよく言っている」の6項目から成り、「情緒的サポート」($\alpha = 0.71$)とした。第2因子は子どもの勉強や学習環境への気配りを表すもので、「子どもに勉強を教えている」、「子どもの部屋等を片付けている」の2項目で「勉学への指導と学習環境への配慮」とした。第3因子は生活面での関与を示すもので、「子どもの衣服等を洗濯している」、「子どもの食事を用意している」の2項目を使用し、「生活への関与」とした。母親の支援行動に関する項目も父親と同様に主因子法を用いて行ったが、第1因子は「情緒的サポート」(5項目、 $\alpha = 0.70$)、第2因子は子どもの勉強や学校に遅刻しないためのサポートを表すもので、「子どもに勉強を教えている」、「学校に遅刻しないため、子どもを起こしてあげている」の2項目で「勉学への指導とサポート」とした。第3因子は父親と同様の2項目であるため「生活への関与」とした。それぞれの項目において得点が高ければ、父親の子どもへの「情緒的サポート」、「勉学への指導と学習環境への配慮」、「生活への関与」と、母親の子どもへの「情緒的サポート」、「勉学への指導とサポート」及び「生活への関与」といった養育行動の頻度が高いことを意味する。

4) 夫婦関係の質 末盛(2008)を参照し、夫婦関係の質を夫婦関係満足度と夫婦間の葛藤に分けた。現在の夫婦関係に関してどのぐらい満足しているのかを「家事への取り組み」、「子どもへの関わり」、「結婚生活全体」の3項目に対して、「1. そう思う (4点)」～「4. そう思わない (1点)」の4件法を用いて母親に尋ねた ($\alpha = 0.67$)⁴。得点が高ければ、夫婦関係満足度が高いとされる。夫婦間の葛藤については、どれくらいの頻度でもめるのかを子どもの「しつけ」、「成績」、「将来」、「生活」の4項目に対して、「1. 毎日 (4点)」～「4. 全くない (1点)」の4件法を用いた ($\alpha = 0.87$)。得点が高ければ、夫婦間の葛藤が多いことを意味する。

5) 性別役割分業観 「男性は仕事、女性は家事・育児に専念すべきだ」、「家事は女性の仕事なので男性はやらなくてもいい」、「男性も家事をするべきだ」の3項目に関して、「1. そう思う (4点)」～「4. そう思わない (1点)」の4件法を用いて父親・母親ごとに尋ねた(父親 $\alpha = 0.64$ 母親 $\alpha = 0.60$)⁴。得点が高ければ、父親・母親の性別役割分業観が保守的であることを意味する。

6) 父親の家事参加 父親の家事参加の測定変数は、加藤(2001)を参照して作成した。「ゴミ出し」、「日常の買い物」、「部屋そうじ」、「洗濯(取入れだけでも可)」、「食事の用意」、「食事の後片付け」の6項目に関して、「1. 頻繁にする (4点)」～「4. 全くしない (1点)」の4段階で父親の回答を求めた ($\alpha = 0.84$)。この尺度では得点が高ければ、父親の家事参加の頻度が高いことを意味する。

7) 子どもの価値 子どもの価値について総務庁(1987)の尺度を参照し、10項目を父親に尋ねたが、分析には主因子法で抽出した最上位の項目のみを用いた。具体的には「自分の志を継いでくれる後継者をつくる」、「一家の働き手として必要である」、「老後の面倒を見てもらう」、「家の存続のためである」、「家族の結びつきを強める」の5項目を使用し「家の存続意識」とした(以下、家の存続意識と表記)。回答項目は「1. そう思う (4点)」～「4. そう思わない (1点)」である ($\alpha = 0.76$)。得点が高ければ、父親の持つ子どもへの価値は、保守的であり、すなわち父親の家の存続意識が強いことを意味する。

8) 父子の会話頻度 父親とどのぐらい話しているかについて、「1. 毎日のように話す (4点)」、「2. 週に2～3日話す (3点)」、「3. 月2～3日話す (2点)」、「4. ほとんど話さない (1点)」の4件法を用いて子どもに尋ねた。得点が高ければ、父子間の会話がより多くされていることを意味する。

4. 分析手法

最初に各変数の記述統計と相関係数について述べる。次

に、概念モデルに基づくパスモデルを、AMOS を用いて分析した。性別、子どもの数、父親の年齢、父子居住距離の4つの属性変数には無回答の欠損値を除き、それ以外の変数の欠損値は平均値で置き換え、最終的には合計 645 組（父親 645 名、母親 645 名、子ども 645 名）を対象にして分析を行った。

IV. 分析結果

1. 記述統計

各変数の平均値、範囲、標準偏差を表 2 に示す。記述統計の結果によると、子どもの父親からの情緒的自立がやや高い傾向にあった。このようなことから、親子の関係性のなかで育てられる情緒的自立はおおむね良好であるといえよう。

生活面での自立において平均値が中央値とほぼ変わらないが、ばらつきが情緒的自立と比較してやや大きい。寄宿生が 6 割を占めており、彼らは幼い頃から家を離れ（幼稚園・小学校 3 割、中学校 5 割、高校 2 割）、数年間の寄宿生活に慣れており、身の回りのことを一人でできるようになったため、生活上の自立能力が鍛えられていると考える。一方親と同居している子どものほうが、親からの援助を得やすいため生活面での自立がやや低い。

父親と母親の支援行動では、情緒的サポートはやや高い数値を示したが、父親のほうが母親より平均点が高かった。子どもの勉学へのサポートと生活への関与については、父親のほうが母親より低かった。このような結果から、父親よりも母親のほうが、子どもの生活、勉学指導やサポート

に頻繁に関わっていると推察できる。夫婦関係満足度の平均値はやや高い傾向にあり、夫婦間の葛藤に関しては低い数値が示されたので、夫婦関係は総じて良好であると言える。また、父親の家の存続意識については弱い傾向にあった。

2. 相関分析

表 3 に、各変数の相関係数を示した。子どもの情緒的自立と父親の情緒的サポートには正の相関がみられた ($r = .302, p < .001$)。父親の情緒的サポートが高い場合、夫婦関係の満足度が高く、子どもの父親からの情緒的自立が高いことが示された。また、子どもの生活面での自立と父親、母親の生活への関与は負の相関（父 $r = -.137, p < .05$; 母 $r = -.386, p < .001$ ）があり、親が子どもの生活に関与しない場合、子どもは生活面で自立している傾向がみられた。父親の性別役割分業観が保守的な場合、父親の子どもへの情緒的サポートが低く、子どもの生活面での自立が低いことが示された。父親と子どもの住まいが遠い場合、子どもの生活面での自立が高いことが示された。

3. パス解析

パス解析の結果を図 2 に示した。モデルの適合性を示す指標は、 $X^2(95) = 389.55$ 、 $GFI = .94$ 、 $AGFI = .91$ 、 $RMSEA = .06$ であり、このモデルとデータの適合度は妥当であるといえよう。分析の結果、父親の子どもに対する情緒的サポートが高ければ、夫婦関係満足度が高くなり、母親の子どもに対する情緒的サポートも高くなる。一方、母親の夫婦関係満足度が高ければ子どもの生活への関与が

表 2 記述統計量

	項目数	範囲	平均値	SD	α 係数
子の父親からの情緒的自立 (父)	6	6 ~ 24	17.20	3.49	.75
子の生活面での自立 (父)	7	7 ~ 28	17.07	4.49	.86
情緒的サポート (父)	6	6 ~ 24	18.31	3.16	.71
勉学への指導と学習環境への配慮(父)	2	2 ~ 8	4.23	1.67	-
生活への関与 (父)	2	2 ~ 8	3.92	1.70	-
情緒的サポート (母)	5	5 ~ 20	15.94	2.64	.70
勉学への指導とサポート (母)	2	2 ~ 8	5.51	1.76	-
生活への関与 (母)	2	2 ~ 8	5.68	1.64	-
夫婦関係満足度 (母)	3	3 ~ 12	9.56	1.48	.65
夫婦間の葛藤 (母)	4	8 ~ 32	15.10	5.14	.87
父親の家事参加 (父)	6	6 ~ 24	14.60	4.19	.84
家の存続意識 (父)	5	5 ~ 20	10.86	3.80	.76
性別役割分業観 (父)	3	3 ~ 12	6.00	1.91	.64
性別役割分業観 (母)	3	3 ~ 12	5.52	1.75	.60
父子の居住距離 (子)	1	1 ~ 4	2.50	1.23	-
父子の会話頻度 (子)	1	1 ~ 4	2.48	.91	-

注. カッコ内は回答した対象者を表記

表 3 相関分析

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	
1. 子の生活面での自立 (父)	1																		
2. 子の父親からの情緒的自立 (父)	.048	1																	
3. 情緒的サポート (父)	.122 **	.244 ***	1																
4. 勉強への指導と学習環境への配慮 (父)	-.040	.070	.146 ***	1															
5. 生活への関与 (父)	-.024	.026	.090 *	.241 ***	1														
6. 情緒的サポート (母)	.102 *	.153 ***	.398 ***	.100 *	-.038	1													
7. 勉強への指導とサポート (母)	-.093 *	.020	-.003	.461 ***	.020	.130 **	1												
8. 生活への関与 (母)	-.291 ***	-.035	.076	.029	.248 ***	.018	.125 **	1											
9. 父親の家事参加 (父)	.077	.030	.114 **	.222 ***	.395 ***	.000	.023	.010	1										
10. 家の存続意識 (父)	.093 *	.082 *	.077	.210 ***	.200 ***	.084 *	.173 ***	.009	.111 **	1									
11. 夫婦関係満足度 (母)	.057	.234 ***	.206 ***	.125 **	.058	.274 ***	.087 *	-.082 *	.146 ***	.117 **	1								
12. 夫婦間葛藤 (母)	.076	.019	-.019	.103 **	.135 **	-.054	.115 **	.003	.071	.205 ***	-.005	1							
13. 性別役割分業観 (父)	-.045	-.082 *	-.171 ***	-.024	-.057	-.096 *	.052	.060	-.139 ***	.168 ***	-.136 **	.094 *	1						
14. 性別役割分業観 (母)	.057	-.015	-.068	.035	.152 ***	-.109 **	.027	-.014	.027	.200 ***	-.011	.197 ***	.441 ***	1					
15. 父子の会話頻度 (子)	-.086 *	.236 ***	.161 ***	.005	.089 *	.152 ***	.045	.109 **	.134 **	-.049	.188 ***	-.084 *	-.011	-.047	1				
16. 父子の居住距離 (子)	.179 ***	-.002	-.011	-.096 *	-.066	-.023	-.147 ***	-.072	-.104 **	.012	-.110 **	.038	.011	.069	-.357 ***	1			
17. 父親の年齢 (父)	-.028	.009	-.003	.066	-.063	.020	.145 ***	-.006	.006	.003	-.007	-.093 *	-.023	-.068	-.016	-.063	1		
18. 子どもの数 (子)	.189 ***	-.081 *	-.055	-.097 *	-.078 *	-.018	-.135 **	-.114 **	-.081 *	.056	-.048	.076	.050	.098 *	-.179 ***	.171 ***	.054	1	

注. カッコ内は回答した対象者を表記. *p<.05, **p<.01, ***p<.001

減少するが、母親の子どもの生活への関与が低ければ、子どもの生活面での自立が高くなる。また、父親が子どもに優しく接するほど、子どもの情緒的自立は高くなる。しかし、生活面での自立に与える影響では、子どもの情緒的自立において有意な結果は得られなかった。

父親の子どもの勉強指導や学習環境への気配り、生活への関与が多ければ、子どもの「しつけ」、「成績」、「将来」、「生活」をめぐる夫婦間の葛藤が生じやすいということも分かった。葛藤の多い夫婦のほうが、子どものことに関心を寄せているため諍いが多くなると予想されるが、こういった家庭においては母親の子どもの勉強への指導やサポートが多く見られる。また、父親の支援行動の各因子は、それぞれ母親の支援行動の因子へ正の影響を与えているという結果が得られた。すなわち、父親の情緒的サポート、子どもの勉強への指導や学習環境への配慮、生活への関与のそれぞれが高ければ、母親の情緒的サポート、子どもの勉強への指導やサポート、生活への関与もそれぞれも高くなる。

父親の支援行動を規定する有意な要因は、父親の性別役割分業観、家の存続意識、父親の家事参加、子どもの性別、子どもの数、父子の会話頻度であった。父親の性別役割分業観が保守的であるほど、子どもに対する情緒的サポートが少なくなる。一方、父親の家の存続意識が高いほど、父親のすべての支援行動が高まる。家事参加の多い父親は、子どもの勉強への指導や学習環境を整えることに熱心であ

り、子どもの生活への関与も多いという結果が得られた。子どもの性別に関しては、男子の父親の方が女子の父親よりも子どもの生活へ多く関与しているという結果であった。子ども数も影響要因となり、子どもが少ない家庭の父親は子どもの勉強へより多く気を配っていることが分かる。父親と子どもの住まいが近いほど、父子の会話頻度が高く、父親の子どもへの情緒的サポートも高くなり、子どもの父親からの情緒的自立が高いという傾向が見られた。

母親の支援行動に有意な影響を与えた要因は、母親の性別役割分業観、子どもの性別と子ども数であった。父親と同様に、母親の性別役割分業観が保守的であるほど、情緒的サポートが減少する。母親は女子よりも男子の生活への関与が多く、また、一人っ子家庭の方が、子ども数の多い家庭よりも母親の子どもの勉強への指導やサポートが多いということが明らかになった。

V. まとめと考察

本論文で主に得られた知見について次の3点があげられる。第一に、父親の支援行動は夫婦関係を媒介とし母親の支援行動に影響を与え、そして父親の支援行動と母親の支援行動が子どもの情緒的自立と生活面での自立に直接または間接的に影響することが確認できた。また、父親の支援行動が直接母親の支援行動へ影響を与えていることも明らかになった。父親から子どもの情緒的自立と生活面での自

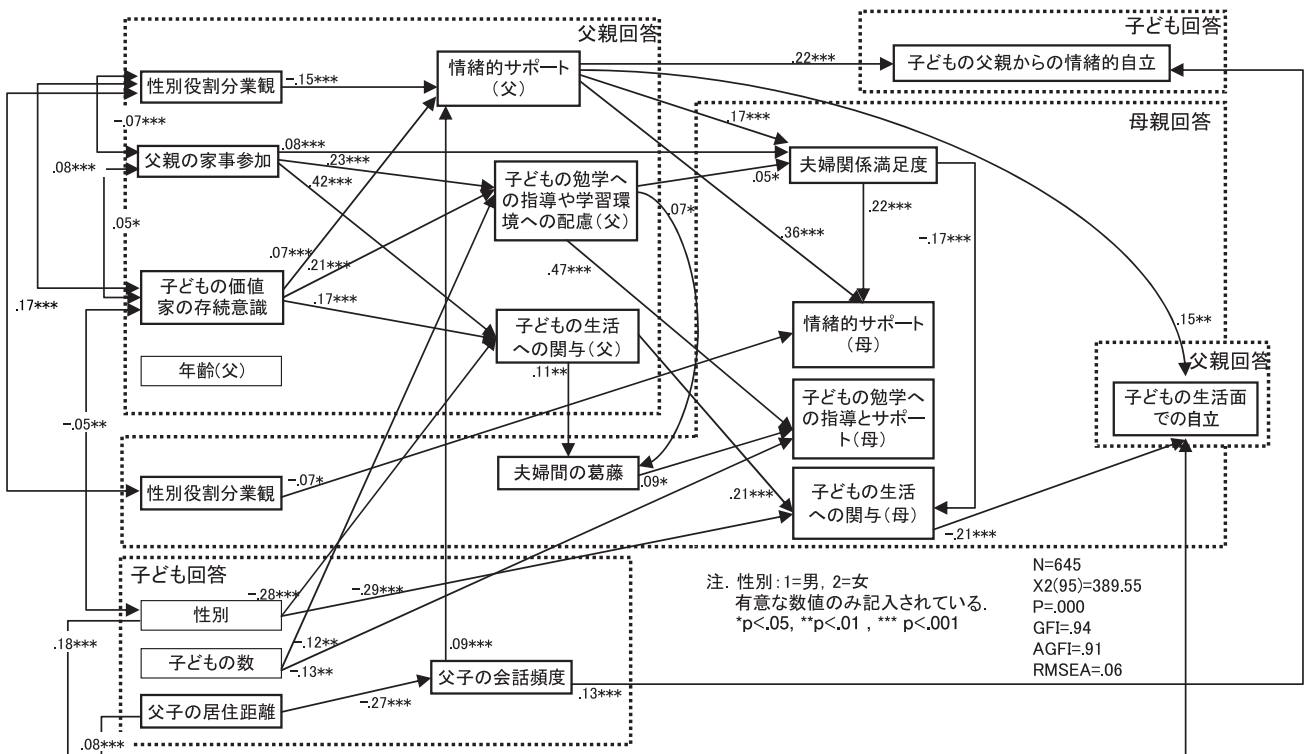


図2 子どもの生活面での自立の規定要因：パス解析の分析結果

立へ直接影響を与えることと、父親の子どもに対する支援の仕方が、母親の子育ての仕方へ影響し、母親が子どもの自立に影響するという家族システム論は中国の山西省の家族においても応用できることが示された。子どもの情緒的自立と生活面での自立を促すには、父親からの情緒的支援が重要となるが、一方で、子どもの生活への関与が多すぎると、子どもの生活面での自立を阻害してしまうことが示唆された。

第二に、父親の情緒的サポートが高ければ、子どもが父親に受け入れられていると思うため、情緒的自立が高くなるということが明らかになった。本研究では寄宿生が多数を占めており、父親・母親と話す頻度をみると、母親と「毎日のように話す」と「週2～3日話す」と回答した子どもが50%⁵であったのに対し、同じ質問項目において父親は38%であり、父子会話頻度は母子会話頻度より低かった。寄宿生の場合、母子間、特に父子間の対面的な交流が少ないと思われるが、公衆電話と携帯電話による交流、または子どもが帰省しない場合に生活費や生活必需品を供給するために、親が学校まで訪ねていく時などにおいて、父親と母親が子どもの生活面と情緒面でサポートしていると推定できる。父親と子どもの住んでいる場所が遠い場合、父親が子どものことに配慮し、子どもと常にコミュニケーションを取り、情緒面でサポートしていることが推察される。このようなことから、父親が子どもに対し情緒的にサポートすることによって親子のきずなが深まり、したがって子どもの父親からの情緒的自立が高くなると考える。そのため、寄宿生の多い本研究では、対象者は親子間が疎遠になるケースが多い思春期の子どもにもかかわらず、父親からの情緒的自立がやや高いという結果が得られた。

第三に、山西省で行った本調査では、二人の子どもを持つ家庭が一人っ子家庭よりも少々多かった。一人っ子家庭の父親と母親は、二人もしくは二人以上の子どもを持つ家庭よりも、子どもの勉学への指導とサポートが多いことが本研究で明らかになった。自由記述欄には「できるだけ勉学に集中してもらうため」、「子どもの身の周りのことをすべてやってあげたいから」などの意見が多かった。内陸部にある山西省の親は子どもの学業成績を重視しており、そして大学進学的重要性を強調し、「良い成績⇒良い大学⇒良い仕事⇒社会的成功」という考えを持っている。そのため、子どもに高い期待を抱いていると考えられる。また、息子を持つ父親は、娘を持つ父親よりも家の存続意識が高い傾向にあった。先行研究で北方地域、特に農村部の特徴として、家系の維持や老後のために息子を育てるといった伝統的な意識が根強いことや、男児に対して家系の存続という期待が高いことが示されているが、本研究においてもこの傾向が確認できた。伝統的な性別役割分業観を持つ父親

は、男子には「養児防老」（老後の面倒を見るため）、「伝宗接待」（代々血統を継ぐ）といった家の存続意識を持っているため、子どもの勉学への指導や生活への関与が多く、子どもの大学進学と将来の社会的成功を大いに期待している。子どもの勉学への指導や学習環境を整えることへの配慮が多い父親は、母親にも影響を与え、母親の子どもの勉強への関心を高くして、子どもの生活への関与も頻繁になる。しかしこの場合、子どもは生活面で親に頼ってしまうために、親は子どもがあまり自立していないと考えているということが本研究において明らかになった。

本論文の限界は、第一にデータの収集を山西省の都市部と農村部に限定したことである。しかし、父親の養育行動が高校生の情緒的自立と生活面での自立にどのように影響しているのかを解明したことによって、親の養育行動の特徴を明らかにし、理論面や社会実践面において新しい知見が得られた。第二に、思春期の子どもの情緒的自立と生活面での自立には、寄宿先での指導や生活状況が影響を与える可能性があるが、それらの影響については検討していないということである。今後の課題として寄宿先の指導状況などにも注目する必要があると思われる。

（謝辞）

本研究の調査実施にあたり、グローバル COE から研究支援助成金を頂きましたことに深くお礼を申し上げます。山西省省庁所在地太原市の調査でご協力を頂きました A 高校の王憲梅先生、B 高校の宋愛文先生、そして運城市 C 高校の岳紅先生、D 高校の李密先生、ご協力くださいました保護者の皆様に、心より深く感謝を申し上げます。

（注）

- 1 先行研究によると、青年の自立は、経済的自立、情緒的自立と生活面での自立などに分類されている。本研究は高校生を調査対象としているが、中国のほとんどの高校生は、親から生活費をもらっている。そのため、本研究の自立概念は、経済的自立を含まず、情緒的自立と生活面での自立のみに焦点を当てた。
- 2 山西省は中国の内陸部の中部地区に属しており、経済において石炭の出産と農産業が支柱となっているため、小農経済の地域として挙げられる。高校の選定には、重点校と普通校各一校と、それぞれにおいて自宅に住む高校生と寄宿生両方を含むことに心掛けた。
- 3 人民元から日本円への換算は、「100 円 = 6.6 元」という為替率で筆者が計算した。
- 4 夫婦関係満足度、父親・母親の性別役割分業観のクロンバック α 係数はやや低いですが、本研究の重要な変数と考えられるため、そのまま使用した。
- 5 父親（カッコ内は母親）と話す頻度について、「毎日のように話す」12.3% (20.3%)、「週に2～3日話す」25.7% (29.7%)、「月2～3日話す」57.1% (46.5%)、「ほとんど話さない」4.9% (3.5%)であった。

(文献)

- Belsky, J., 1981, "Early human experience: A family perspective," *Developmental Psychology*, 17 : 3-23.
- Engfer, A., 1988, Interrelatedness of marriage and the mother-child relationship. In R.A.Hinde & J.Stevenson Hinde (Eds.), *Relationships within families: Mutual influences*, 104-118.
- 畠中宗一, 2007, 『情緒的自立の社会学』世界思想社.
- Hoffman, J.A., 1984, "Psychological separation of late adolescents from their parents," *Journal of Counseling Psychology*, 31(2) : 170-178.
- Holmbeck, G.N., PaoKoff, R.L. and Brooks-Gunn, J., 1995, "Parenting Adolescents" Bronstein, M.H. eds., *Handbook of Parenting Vol.2 Biology and Ecology of Parenting*, London: Lawrence Erlbaum Associates, 91-118.
- Ishii-Kuntz, M. and Coltrane, S., 1992, "Predicting the Sharing of Household Labor: Are Parenting and Housework Distinct?" *Sociological Perspectives*, 35(4) : 629-647.
- 石井クンツ昌子, 2009, 「父親の役割と子育て参加 -- その現状と規定要因, 家族への影響について」『家計経済研究』81 : 16-23.
- 加藤邦子, 2001, 「育児支援が親子関係, 子どもの発達に及ぼす影響—中学生・高校生の保護者を対象として」『家庭教育研究紀要』23 : 68-82.
- 胡荣, 1996, 「アモイ小学生の学業及び家庭教育の調査報告」『当代青年研究』4 : 11-15.
- Lynn, D.B., 1978, *The father*, Monterey, Cal: Wadsworth Publishing Company. (今泉信人・黒川正流・生和秀敏・浜名外喜男・吉森護訳, 1981, 『父親 その役割と子どもの発達』北大路書房).
- 松原達哉・鄧秀, 1990, 「一人っ子の自主性と子どもから見た養育態度に関する研究 - 中国と日本との比較 -」『筑波大学心理学研究』12 : 175-190.
- McCandless, B.R. & Coop, R.H., 1979, *Adolescents: Behavior and Development*, Holt, Rinehart and Winston, Inc. (林謙治監訳, 1985, 『思春期: その行動と発達のすべて』メディサイエンス社).
- 宮本みち子・岩上真珠・山田昌弘, 1997, 『未婚化社会の親子関係: お金と愛情にみる家族のゆくえ』有斐閣.
- 尾形和男, 2007, 『家族システムにおける父親の役割に関する研究 - 幼児, 児童とその家族を対象として -』風間書房.
- 岡堂哲雄編, 1989, 『家族心理学の理論と実際 講座家族心理学 第6巻』金子書房.
- 岡村達也・加藤美智・八巻甲一編, 1995, 『思春期の心理臨床』松岳社.
- 雷秀雅, 堂野佐俊, 2003, 「思春期の子どもをもつ親の養育態度とその要因 - 中国及び日本における実態分析」『アジア研究』2:101-116.
- 孫雲暁, 2009, 『父教力度決定孩子高度』新世紀出版社.
- 総務庁青少年対策本部編, 1987, 『日本の子供と母親: 国際比較』大蔵省印刷局.
- 末盛慶, 2008, 「中学生の子どもに対する母親の養育行動を規定するもの - 『夫婦関係と親子関係のつながり』は本当か? -」『家庭教育研究紀要』30 : 32-42.
- 高橋直美, 1998, 「両親間および親子間の関係と子どもの精神的健康との関連について」『家族心理学研究』12 : 109-123.
- 鄭揚, 2008, 『孤独な中国の小皇帝再考—都市家族の育児環境と社会化』大阪公立大学共同出版会.
- 張麗錦・沈杰・李志強・盖笑松, 2009, 「寄宿制と非寄宿制学校初中生心理健康狀況比較」『中国特殊教育』5 : 5-10.
- 中国社会科学院社会学研究所婚姻家庭研究室, 1994, 『現代中国における都市家族の意識と生活に関する研究: 北京調査及びバンコク・ソウル・福岡との比較』アジア女性交流・研究フォーラム.
- 中華人民共和国国家統計局, 2010, 『中国統計年鑑』中国統計出版社.
- 若林敬子, 1989, 『中国の人口問題』東京大学出版社.
- 若林敬子, 1994, 『中国 人口超大国のゆくえ』岩波書店.
- 八木秀夫, 1990, 『現代日本の家族システムと青年期』神戸商科大学経済研究所.
- 大和礼子, 2001, 「夫の家事参加は妻の結婚満足感を高めるか?」『ソジオロジ』46(1):3-20.
- 尹鈺喜, 2007, 「成人未婚者の自立に影響を与える要因分析: 韓国の場合」『家族社会学研究』19(1): 7-17.
- 楊軍, 2010, 「浅談新時代農村中学寄宿生自理能力的培養」, 『新課程 (中学)』6:13-15.

Effect of Chinese Fathers' Supportive Practices on Emotional Independence and Self-Reliance of High School Students : A Case of Families in Shan Xi Province

Nan LIU

(Interdisciplinary Gender Studies)

Using the family system theory, this study examines how fathers' supportive practices affect those of mothers and adolescents' emotional independence and self-reliance in daily life. This study uses the data collected from 746 second-year high school students of four public high schools, and their parents, in two areas of Shan Xi province, China.

Results of this study reveal the following: (1) Fathers' parental involvement in childcare affects that of mothers; if mothers' parental involvement in childcare is high, the level of adolescents' self-reliance is likely to be low. (2) If fathers' emotional support is high, adolescents' emotional independence on their fathers is likely to be high. (3) Significant deciding factors for fathers' supportive behavior were fathers' gender ideology, fathers' participation in housework, attitude toward family continuity, fathers' age, and child's gender. When fathers have a more conservative gender ideology concept, their emotional support and nurturing for their children were lower. On the other hand, the higher attitude toward family continuity led to greater fathers' involvement in housework and involvement and instructions in children's daily life and academic achievement. On child's gender, fathers of boys rather than girls tended to be more involved with their children's daily life. (4) Significant factors for mothers' supportive behavior were mothers' gender ideology, and the child's gender. When mothers have a more conservative gender ideology concept, their emotional support and nurturing for their children are lower. On the child's gender, mothers of girls rather than boys tended to give more frequent daily life involvement.

The main issues suggest the following: In families of Shan Xi province, fathers' traditional concepts such as raising sons for maintaining family ancestry and retirement and high hopes for boys to carry down the family name are revealed. Fathers with a traditional gender ideology have an awareness of family's continuation, such as "yang er fang lao" (the child takes care of parents when old) and "chuan zong jie dai" (succeed the blood line for generations), and have high hopes for the child's college education and future social success. This leads to fathers with high concepts of family name survival to become more involved and give instructions in children's daily life. Supportive behaviors of such fathers influence mothers, which leads to more involvement by mothers in children's life. When this happens, children become personally dependent on their parents and their self-reliance in daily life becomes low.

Keywords: adolescents' emotional independence, adolescents' self-reliance in daily life,
family system theory, fathers' supportive practices, mothers' supportive practices.